

1

(2・3・5・6 各完答)

1 a 目次

b 関係

c 固定

2 1 上達する

2 作業

3 X ウ

Y ア

Z エ

4 上達しなく

5 A ア

B エ

C ウ

6 I 段

II ス

III 問

7 ウ

8 堂

9 パソコン(ソフト)

10 基本

11 ウ

2

(2・5 各完答)

1 a 楽屋

b 不思議

c 手帳

d 荷物

2 1 エ

2 マ

2 踊り

3 ア

4 エ

5 A イ

B ウ

C ア

D エ

6 イ

7 ウ

8 (記述題)

9 ア

10 イ

11 エ

12 ていたわ

2

8

わ	い	賞	エ	自
れ	た	も	マ	分
た	の	で	に	の
か	に	き	勝	踊
ら	、	な	っ	り
。	一	い	ど	は
	位	と	こ	未
	だ	思	ろ	完
	と	っ	か	成
	言	て	入	で

(同意可)

配点	
1	1
2	1
各2点×	7=14点
2	8
その他	各4点×20=80点
100点	

1

- 1 a 「目次」はまったく難しい字ではないが、どういう字を書くか覚えていただろうか。b 「関係」は「係」の右側が続け字にならないように注意すること。c は「固定観念」というひとまとまりで覚えておいてほしいことばである。
- 2 続きを読んでいけば、「ノートづくり」をマジメにやっている人が陥りがちなことについて説明されている。1は「〜」という目的に注目すれば「上達するため」ということばに気づける。筆者が「作業」を否定的にとらえていることが読めれば、2の内容は推測できるだろう。
- 3 「〇〇的」という熟語は説明的文章においてよく出てくるため、知識として意味を把握しておくこと。基本的には意味・用法がわかっているはずである。
- 4 続きを読んでいこう。「作業を頑張ってしまう」のは、頑張ることによって何かメリットになることがあるからである。「周囲からも、『頑張っているね』『勉強しているね』と言われる」というのもあるが、字数には合わない。
- 5 (A) は直後に平面図形の例を出している。「たとえ」が入る。(B) は直前の内容を受けて「私はこう言う」と言っている。「そこで」が入る。(C) は直前でパソコンソフトの利点を述べ、直後で否定的な内容を述べているので「しかし」が入る。
- 6 直前の段落でほぼ同じことが語られている。「冷静に対処」などのことばに注目しよう。
- 7 直前に「これは」とあるが、この指示語が指している内容自体が「本質」ではなく、「本質を示している」事実であることに注意しよう。数学でも文学でも結局紙の上に書いて考えるのだから、「書く」ということが「考える」ということなのだと言いたいのである。文脈上も筆者は「書く」＝「考える」という内容を主張している流れになっている。
- 8 空らの直前の「頭の中だけで考えようとすると」に注目しよう。ここより前に「頭の中だけで考えていると、思考は堂々巡りになり」とあった。
- 9 「ツール」とは道具のこと。ノートのことだと思わないように。次の段落で具体例が示されている。
- 10 「古典が見直されている」のはどういう流れなのか、と考える。直後の「ノートの実力が見直されている」ということもふくめて、「基本に立ちかえろう」とする流れなのである。
- 11 アは文章冒頭で否定できる。「ノートづくり」がただの「作業」になつてはいけけないのである。イは脳に食欲がないのは「ノートを書いているとき」ではなく、「作業」しているときである。「ノートづくり」すべてが「作業」ではないので混同しないようにすること。ウは筆者の考えと一致する。「どうしてみんな書き続けられないのだろう」とあるし、書かない人が多いからこそこのような内容の文章が書かれているのである。エは因果関係のないつながりを因果関係があるように書いているので誤り。

2

- 1 この中でも特にa 「楽屋」はことばを知らないかどうかという字を書けばいいかが浮かばなかったのではないだろうか。舞台の後ろにあり、役者や演者が出演前の準備などをする部屋である。b 「不思議」の「議」は右側の形を正しく書くようにすること。
- 2 唐突に始まる場面なので落ち着いてイメージしていこう。直後で「踊り終えたエマ」とあり、「あたし」はエマの踊りをとても高く評価していることから、エマの踊りと自分の踊りを比較して、自分の踊りを低く評価したのだとわかる。
- 3 直前の発言では先生もエマを称賛しているが、直後の発言では「全部ダブルじゃねえ。理佳ちゃんと差がつきすぎちゃって、気の毒だったわ」とある。これは「あたし(理佳子)」のほうが踊りの「技術」では上だったということと言っている。「気の毒」というのはエマに対して使っていることばであることを読み取ってほしい。また、空らん直後の「不敵な笑み」もヒントになる。つまり自分の教え子である理佳子が、才能あふれるエマにも勝っているという「優越感」なのである。
- 4 「あたし」はエマに完全に負けたと思っっているのに、先生は「あたし」の方が上のようなことを言っている。その発言を聞いてため息をついたのである。先生はエマを評価していないわけではなかった。ウの「全然評価していない」はおかしい。
- 5 イメージがつかみややすいものから入れていこう。(B) に「うきうき」を入れないように注意すること。ここでは「あたし」はまだ自分の勝利に困惑しており、素直に喜んでいる状態ではない。
- 6 直後で「信じられないのはあたしも同じだった」とある。エマが二位と発表されたことに驚いたのである。アはまだ「あたし」が一位だと発表される前なのでおかし。ウも自分が呼ばれる前提になっている表現なのがおかしい。自分は入賞すらしていないと思っただけなのである。
- 7 正確に場面をイメージしてほしい。初めから「呼ばれるはずがない」と思っていた「あたし」は自分の番号が呼ばれても全然気づいておらず、そのため審査委員長が「やれやれといった顔」でもう一度「あたし」の番号と名前を呼んだのである。アは自分が呼ばれたことがわかっているので誤り。
- 8 「耳を疑う」というのは聞こえたことが信じられないということだが、その理由はここまでの流れを正しく読めればわかるはず。説明の中心は「自分は一位のはずがないと思っっていたのに、一位と言われた」となる。これを骨組みとして、四十字を超えるように説明を付け加えていこう。
- 9 直後の内容から、すでに「あたし」がこの結果を受け止めたうえで、次に向かっという姿勢になっていることがわかる。
- 10 この後のお母さんの発言に注目しよう。「今から戻ればセンターレッスンの最後に間に合う」とあるので、「あたし」が「練習したい」と言ったことがわかるし、そもそも話の流れからして、他の選択肢はないはずである。
- 11 「重い」「軽い」もこれからのいろいろな状況を暗示している(最終段落の「花も棘もある」につながる)と言えるが、「行く手を明るく照らしていた」は間違いなく未来に向けてのプラスの暗示である。アはすでにエマは「あたし」の踊りをほめちぎっていたのでおかし。イは舞がおかしい。
- 12 母の発言「進脩学園の〜」↓聞こえないふり↓その理由という流れになる。